



邸宅や教会などが立ち並ぶ芦屋川沿いで一際目立つコンクリート打ちっ放しの建物。市民活動や講演会などが催される芦屋市業平町の芦屋市民センター本館と天ホール（ルナ・ホール）は、建物そのものにも見所が多い。

芦屋川沿いに立つ芦屋市民センター。右が本館、左が大ホール



芦屋市民センター

こだわりの空間 随所に

建築家・坂倉準三の事務所の設計で、建築ファンがよく訪れている。坂倉は世界遺産への登録が決まった国立西洋美術館（東京）の設計で知られるル・コルビュジエの弟子で、同美術館の建設にも携わった。

構造や、自然光を採り入れたデザインなど、同美術館に通じる特徴がある。「建設当時、斬新すぎて違和感があった」と話す市民もいるが、今では芦屋らしい景観として親しまれている。

「ル・コルビュジエの建築を連想させる」と、建築ファンたちには人気の廊下だ。大小さまざまな飾り棚が埋め込まれた白い壁は、形の異なる窓を壁に配置したル・コルビュジエの代表作、ロシヤンの礼拝堂（フランス）を思わせる。

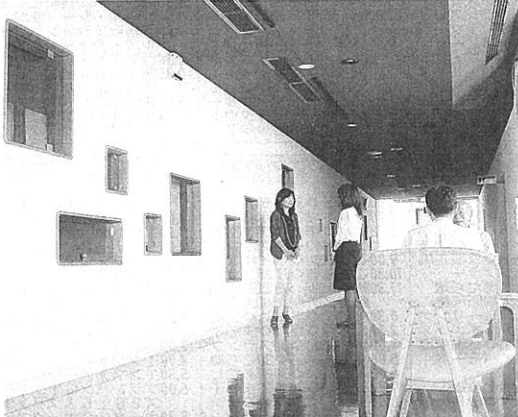
芦屋市出身の三宅正弘・武庫川女子大生活環境学部准教授（都市計画）は「ル・コルビュジエの建築にみられる様々な特徴を、一つの建物で見ることができる面白い場所」と話す。

一方、70年に開館し、演劇やライブなどが催される大ホールのホワイエ（ロビー）は、黒い床や壁、天井を貫くように横切る白い線が目を引き、芦屋を拠点に活動し、世界的に知られた前衛美術グループ「具体美術協会（具体）」のリーダー・吉原治良が手がけたもので、斬新なアイデアにあふれた空間は、訪れた人々を非日常の世界へと引きこむ。

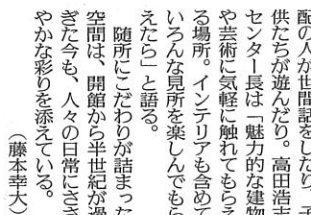
舞台や客席は黒で統一。センターによると、落語家の桂米朝はかつて、ホールで初めて独演会を開き、地獄が舞台の演目を披露した際、「何やこのホールは薄暗くて、地獄の二丁目のような気がする」ところや」と述べたという。

本館の多目的ホール前には、具体のメンバーで、画家の白髪一雄が手がけた抽象画「芦屋」が飾られている。自然豊かな風景を思わせる緑が基調の作品で、今年新たに修復された。作品の前では、年配の人が世間話をしたり、子供たちが遊んだり。高田浩志センター長は「魅力的な建物や芸術に気軽に触れてもらえ、いろいろな見所を楽しんでもらえたら」と語る。

随所にこだわりの詰まった空間は、開館から半世紀が過ぎた今も、人々の日常にやさやかな彩りを添えている。（藤本幸大）



ル・コルビュジエの建物の基に、黒を基調とした廊下や天井など、黒い床や壁、天井を貫くように横切る白い線が目を引き、芦屋を拠点に活動し、世界的に知られた前衛美術グループ「具体美術協会（具体）」のリーダー・吉原治良が手がけたもので、斬新なアイデアにあふれた空間は、訪れた人々を非日常の世界へと引きこむ。



ル・コルビュジエの建物の基に、黒を基調とした廊下や天井など、黒い床や壁、天井を貫くように横切る白い線が目を引き、芦屋を拠点に活動し、世界的に知られた前衛美術グループ「具体美術協会（具体）」のリーダー・吉原治良が手がけたもので、斬新なアイデアにあふれた空間は、訪れた人々を非日常の世界へと引きこむ。



ル・コルビュジエの建物の基に、黒を基調とした廊下や天井など、黒い床や壁、天井を貫くように横切る白い線が目を引き、芦屋を拠点に活動し、世界的に知られた前衛美術グループ「具体美術協会（具体）」のリーダー・吉原治良が手がけたもので、斬新なアイデアにあふれた空間は、訪れた人々を非日常の世界へと引きこむ。

ル・コルビュジエの建物の基に、黒を基調とした廊下や天井など、黒い床や壁、天井を貫くように横切る白い線が目を引き、芦屋を拠点に活動し、世界的に知られた前衛美術グループ「具体美術協会（具体）」のリーダー・吉原治良が手がけたもので、斬新なアイデアにあふれた空間は、訪れた人々を非日常の世界へと引きこむ。